

小金井環境フォーラムの中で、ささやかな読書会を行います。参加者は数名程度としますので、ご希望の方は担当者にメールをください。交通などご案内します。

日時：2021年11月18日（木）、13：30～15：30

場所：小金井環境楽習館、小金井市、武蔵小金井駅から歩いて数分。

話題：街を耕す、先達明峯哲夫の著作をめぐって

担当者：木俣美樹男 kibi20kijin@yahoo.co.jp

ご参考まで、参加費などはありません。

課題図書：明峯哲夫 2016、生命を紡ぐ農の技術、コモンズ、東京。1800円

1. 先達明峯哲夫の関連著作リスト（森とむらの図書室）

1) たまごの会 1979、たまご革命、三一書房、東京。

2) 明峯哲夫 1979、われらが世界の創造を、湯浅欽史発行、東京。

平場では米を作ればよいわけですが、とはいえ、現実にはそれすら許されない政治状況があります。米のできない所で、つまり傾斜地や水利の悪いところで、どういう農業をしていくのかということが、これからの日本の農業を考えていく上で最も重要な課題のひとつだと思ふのです。山地では、お茶ができる、養蚕もやってきた、こんにやくも作っている。けれども平場における稲作農業に匹敵する山地農業の形成は、畑作とか畜産とかが組み合わせられてきたものになるのでしょうか、極めて貧困ではなかったかと思ふのです。第2農場を作るとしたら、平場ではなく、今こそ山に踏み入ろうと思ふ。そこで歴史的にも打ち捨てられてきた山での農業の在り方、暮らし方をもう一度考え直そうと。このような試みの中で、今直面する過疎の問題、山では人は暮らせないという問題も氷解していくのではないかと思ふのです。

3) 明峯哲夫 1985、やば耕作団、風濤社、東京。

4) 明峯哲夫 1990、ぼく達は、なぜ街で耕す、風濤社、東京。

「究極の都市農業」はごく素朴な自給農業だろう、と言いたいのです。このような自給農場が都市の中にたくさんできれば、市民農園と違って利用する農地の規模が大きいだけに、都市内の農地を保全する一つの有効な手法になるはずと、ぼくは考えています。ぼくはやば耕作団のような都市住民による耕作の場は、都市住民の「学校」だと思います。都市住民の農業とは、売るためのものではなく、あくまでも自分たちの食べる食べ物を作る農業です。

減反政策というのはたんぼに草を生やしていても、国は補助金を出した。それ以降、農民は完全に作る意欲を失くしてしまい、みんなが主食の米を大事にするという心を失ったということです。

およそ一万年前、人間は「農耕」を発明します。食べ物を自分の力で「生産」できるようになったのです。農耕が始まったばかりのときは、おそらくほとんどの人々が耕していたのだらうと思ふ。けれども時代が下るにつれ農耕を、それを専門にする人間に委託する、あるいは「強制する」システムができあがる。結局、人間の歴史において「国家」というのは何であったのかと言うと、「奴隷労働の組織化」ということでなかったか。つまり、人間をいかに土地に縛り付け、いかに効率よく労働させ、いかに生産物収奪していくのか

というシステムとして、国家というものが発生し、強化されてきたと考えて良いと思います。

これまでの人間の歴史の中で、存在した農耕とは結局「強制としての農耕」あるいは「利潤追及としての農耕」だけだった。一人一人がやる気を起こして、生き生きと働く、誰にも強制されない。自分がやりたいからやるのです。それは楽しく、喜ばしい労働であるはずで、自分自身のため、家族のため、そして隣人のための農業であるならば、一日に二、三時間も働けば十分であろう。「自分の食べる物は自分で作る」が農業の原点になるからです。結局、業としての農、つまり農業は廃止される。一人一人の生活の自立と自由手助けする「農」の営みだけが残る。

5) 明峯惇子 1991、生命の声にきく暮らしへ、風濤社、東京。

一人ひとり自由でありながら、社会としては全体に自己を律することは可能なのでしょうか。あるところで自然と折り合い、ほどほどの生産に留まる、そんなことはできないのでしょうか。それが、今私たちにためられているように思います。

6) 明峯哲夫 1993、都市の再生と農の力、学陽書房、東京。

膨大な「宅地化する農地」はまもなく耕作者を失おうとしている。「宅地化する農地」は、何よりも新たな耕作者を求めているのだ。新たな耕作者とは誰か。それは都市住民をおいてない。農地所有者がギブアップしてしまえば、残るは都市住民しかいないのだ。

7) 明峯哲夫・石田周一編著 1996、街人たちの楽農宣言、コモンズ、東京。

人間は野性動植物の遺伝的資質に手を染め、それを人間好みに「改良」し、家畜化した。森林や草原に火を放ち、畑にした。それまではあるがままの自然に、生のすべてを委ねていた。まさに自然の一員だった。しかし、農業を発明した人間は、自らを自然の支配者に押し上げてしまった。農業は生物的自然を破壊し、一方で人間的な自然（農業的自然）という新しい自然の秩序を創り上げたのだ。農業を発明するまで、人間は自然に生かされていた。人間は農業を発明したおかげで、とてつもない難題を背負うようになった。その難題とは、人間と自然とが共存するギリギリのある一点を探し出し、それを維持し続けるということである。農業は人間の「苦悩」の根源ともなったのだ。「苦悩」を知ることは、人間という動物だけに与えられた「特権」であろうか。その「苦悩」を農業が生み出したとすれば、その意味でも農業は人間のもっとも根源的な営みと言ってよい。もし現代の人間が採集・狩猟の時代に立ち戻りたいと願っても、それを許す十分に広い生物的自然はもう地上にはない。農業は本来的に、自然に対して破壊的である。より小規模で素朴な営みに戻らなければならない。その代わり、誰もが耕すのだ。

8) 明峯哲夫 2016、生命を紡ぐ農の技術、コモンズ、東京。

その他：講座農を生きる、など多数の論考がある。

2. 略歴（公表から整理）

1946年 埼玉県生まれ。

1968年 北海道大学農学部卒業。

1970年 北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。

1972年 同博士課程中退。

1972～1974年 栃木県河内農場で有機農業（山岸式農業養鶏法）を研修。

1974年 茨城県でたまごの会八郷農場（消費者自給農場）の創設と運営に参加。

1980年 東京都国分寺市に移住、農業生物学研究室主宰。

- 1981年 東京都国立市でやば耕作団を結成。やば耕作団代表。
- 1984年 日野市に移転。都市内の耕作をより重層的に充実するために、近郊山間地に親農場を構想し、神奈川県藤野町や山梨県上野原町で土地探しを続けたが実現しなかった。
- 1997年 やば耕作団解散。埼玉県鶴ヶ島市に移住。市民のための農学校などで講義。
- 2011年 NPO 法人有機農業技術会議の代表理事。
- 2013年まで予備校で生物学を教える。
- 2014年 逝去

3. 課題図書(8)の概要

序章：

土づくりに励む有機農業。耕すことは最低限にとどめなければならず、無施肥、不耕起、無除草などを原則的な方向とする自然農法が成立する。家畜の存在は良質なたい肥をつくるうえで有効だ。農業経営の面から言えば、穀物、普通作物、野菜類、果樹類、畜産などを交えた多品目、少量生産を目的とする複合経営がもっともふさわしい。

第1章：

農業は謎に満ちた営みです。それは生命の複雑系です。分からないことがたくさんあります。比較的持続的な優れた農業といえるものは、焼畑耕作、水田耕作、畑作農業、西欧農業の4つである。

少なくとも数千年、長く見れば4億年の土壌のストックの森林や草原の恵みを畑に活かして農業ができる。農業はこの恵みを消費する過程である。農業は遷移と呼ぶ自然生態系の有機物蓄積のシステムに依存している。ある土地のある時点で、人間は開墾、耕起、除草などを行い、遷移を止めてしまい、農業を開始する。森林を伐採して、畑を拓いて農業を始めると、地面に光が当たり、有機物のストックは消費され、これは自然史から見た農業の宿命的位置である。有機物の還元施用を行わない慣行農法では、有機物の存在量が下がり、土の力は下がる。

植物は自分の力で育ち、その自然の原理を応用するのが有機農業であり、自然農法である。植物自身が生産した有機炭素は植物自身の拡大再生産を導き、有機炭素が鍵を握る物質で、これが土壌生態系を動かす。このことを技術化することが、有機農業、自然農法、低投入持続型農業、無施肥農業のための基本的筋道である。

第2章：

里山の資源利用には節度とルールが必要になる。かつての里山には入会という地域資源をみんなで上手に使っていく社会的仕組みがあった。

農業とは穀物を栽培し、家畜を飼育することで、これがぼくの原則論である。都市民でも少し努力し、工夫すれば、自分たちが食べる野菜くらい自分で作れる。都市の在り方として市民たちが自分たちで野菜を作ることを復活させていく。これを社会的な仕組みとするべきだと考える。

各地域には優れた伝統的輪作体系がいろいろあった。村の古老たちはその土地の土地利用や輪作体系の在り方をよく知っている。素晴らしい知恵が埋もれているかもしれないので、それを聞き出してください。

第3章：

有機農業、自然農法の営農の視点から自然選抜の意味も大きい。農業は風土的なものだから、地域の条件に適した選抜、栽培条件に適した選抜、栽培者の好みや癖を活かした選抜も大切だ。自家採種については適切な知識と経験がいる。

第4章：北海道のこと

第5章：

1960年代からの大学闘争のとき、ぼくは大学院生であった。農業生物学という学問はあるのかについて教授たちと議論した。1970年代には農学全体が学問の体系を失うほどに、追い詰められていた。今の自然科学はどんどん狭く細分化し、自分の位置、自分の存在が全然わからなくなっている。農学の解体、喪失の時代に居合わせ、その後、農薬や食品公害が問題になった。このことに大学側の人間はほとんど無自覚であった。

ルイセンコがわざわざ農業生物と言っていたのは、科学と生産は結合すべきだ、だからと科学なんかやっているな、という話なんです。共産主義社会の中で、制度化され、科学者は奴隷のように権力のために働くということで、ルイセンコはその典型であった。こうしたソビエト生物学、あるいはルイセンコの農業生物学全体をぼくは全然支持するつもりはないけれど、彼が夢想した生命観はこれからの時代にも有効性はあると思う。彼は一貫してロマンチスト、哲学者であって、科学者ではなかったかもしれない。

ぼくは大学院生として全共闘の一味になった。科学批判、産学共同路線粉碎と言っていた。今は、科学は本当に制度化されていて、それ以外の科学は存在できないとも考えざるを得ない。科学の自由は幻想だから、アカデミズムにいることは潔しとしないと総括した。この時の総括は非常に理念的、抽象的で、今その時のぼくらの文章を読んだりすると、恥ずかしいかぎりだ。プロの科学者にはならない。ひとりの生活者、ひとりの人間として農業をやりながら、そして同時に科学者たろうとした。ぼくの場合農民になり切ってしまうということではなかった。制度の中の科学者には戻れない、現場で農業実践に取り組み、その中で、自分たちなりの新しい生命観、新しい農業の在り方を求めていくという、とても厳しい道を選んだ。

おれたちはエコロジー派ではなく、農業派だと宣言していた（1971）。いまだにぼくらはエコロジー派ではなく、ナチュラルリストであってはならないと思っている。

茨城県八郷町でたまごの会発足、都市住民300世帯が参加、養鶏と野菜を中心にした有機農業活動であった。耕す市民というのは、市民が鋤をもつ、物を生産する、食べる、消費するということを分離してはならないということだ。

野暮耕作団（1981）、能的暮らしのレッスン（2000～）、ぼくは革命家だよいのだが、相手が困るようなので、農業生物学研究室（1981～）を名のった。ぼくは今、人と社会のあり方も含むこととして、農業生物学を捉えている。

鼎談：明峯さんの部分のみ要約

植物採集が嫌いで、解析的な植物学をやりたいと思っていた。今から思えば、植物採集は植物学教室の古き良き伝統であった。この伝統を大学闘争でぼくらの世代が壊してしまった。その古き良き教授たちを僕らは罵倒して、大学を出てきてしまった。何と残酷なことをしてきてしまったかと反省している。

ぼくは今でもルイセンコの説に強く惹かれている。現代の生物学では基本的に獲得形質の遺伝はないと言われているけれど、ぼくはあると思っている。その説明は難しいが・・・。

遺伝学はほとんど数学理論になってきており、それは確率論による説明となっている場合が多いようです。

(中島：生物学では品種などという概念はつまらない瑣末な概念だと思っていた。生物学は基本的には種は種であるから、両者はかみ合わない。) そうですね、全然理屈の深まりがないんですよ、育種学には。農学を構成する主要な個別の学問はほとんど固有の方法論や思想を失っていた。農学というまとまりはとうの昔に解体してしまっている。

農業は工業資材消費産業に堕していく。1950年代ごろまでは有畜複合が日本農業の基本だと言っていた技術者の多くが、あつという間に宗旨替えしていった。心の中では忸怩たる思いがあったと思う。

今から考えると不思議とも思えるけれど、基本的には堆肥のような有機物を入れて地力を増進していくのは農業の根幹だということを誰もが了解していた時代であった。伝統的な農業技術論的な議論が全部おしゃかになっていく。それが日本社会全体の繁栄につながるんだと言いつけ、そうした社会の流れに研究者や技術者はほとんど抵抗できなかった。その過程で、大学の農学部名や学科編成は生物資源学部、生物資源学科というふうに変更され、これは農学から逃げ出したのだと思う。あるのはみんな環境問題、環境研究ですね。

可能性があるのは民間農法の展開ではないか、そこで山岸式農業養鶏法と出会った。それから40年もたつて、もう一つの民間農法、秀明自然農法に出会った。既成のアカデミズムはパラダイムの転換ができずにいる。日本の農学はこのまま放っておけば確実に絶えていく。最後のチャンスにぼくらは巡り会えたのだと思います。

4. 参考

降矢さんへの書簡+木俣への訪問：

0) 記録不明

①1980.8；明峰氏自著書籍を送って下さったり、いろいろ自己紹介をされました。岑子とは年代の相違で一致できない点はあるでせうが、山村農、即ち農の原点からの心で語れば通ずるでせう。

②1980.10；十二日明峰氏他二名でお越しになりました。シコクビエの餅とキミの飯を振舞いました。平野に住む人は山間部に憧れるようですが、岑子は日照る土地がいいです。でも遠望がきき、水のよい処で雑穀を多めに食ふ生活は夢であり、理想ではなく空想かも知れぬ。同行されなかった事が寂しかった。

③1980.11；柿の熟柿が沢山あるので、二十三日に暇があつたら明峰氏に採りに来るように便りしたが、どうなりますか。

④1980.12；明峰氏十一月二十四日に来宅でした。山村通ではないようですね。

1) 1981.8.16；明峰氏と上野原に行く。

⑤1981.10；明峰氏も藤野周辺ならば西原より条件がよいでせう。西原は五百～六百米海拔で、次は日照時間短いですからね。西原功成り隠居生活に興味ならいいが、将来ある人達が農に生きようとしても、無理です。

⑤1981.11；明峰氏よりも便りがあり、藤野町予定地にとの事ですね。

⑥1982.11；久々で明峰氏より消息がありました。

2) 1984.11；第1回野外教育セミナー、都市における農業教育、話題提供明峯哲夫

これが日本環境教育学会の源流となった。新聞に2行の案内が掲載され、農村開発企画委員会専務理事の石川英夫さんが目にとめ、参加くださり、その後、木俣を森とむらの会

に勧誘し、高木文雄会長に引き合わせてくださった。以後、高木師のご助力で環境教育が行政関係にも普及することができるようになった。

- 3) 1985. 4. 14 ; やば耕作団、学大で味噌づくり
- 4) 1986. 4. 27 ; やば耕作団、学大で味噌づくり
- 5) 1987. 4. 26 ; やば耕作団、学大で味噌づくり
- 6) 1988. 4. 17 ; やば耕作団、学大で味噌づくり
- 7) 1989. 3. 6 ; リヒャルト氏、学大に来訪
- 8) 1989. 3. 16 ; リヒャルト氏、やば耕作団訪問
- 9) 1990. 4. 22 ; やば耕作団、学大で味噌づくり
- * 1990 秋 ; 著書の寄贈
- 10) 1991. 4. 28 ; やば耕作団、学大で味噌づくり
- * 1991. 6. 3 ; 明峯惇子さんから著書の寄贈
- 11) 1992. 4. 12 ; やば耕作団、学大で味噌づくり
- 12) 1992. 7. 9 ; やば耕作団訪問、環境教育辞典の用語原稿
- 13) 1993. 初冬 ; 著書の寄贈

農耕と農業の比較

項目	農耕	農業
経済	自給、生業	産業、資本多投下
耕作面積	小規模	大規模
従事者	家族	家族+小作人、季節労働者
生産物	生活食料	租税、商品、戦略物資、バイオ燃料
作物	多品種少量生産	特定作物大量生産
栽培方法	有機的	無機的、農薬・肥料多用
生物文化多様性	高い	画一的、低い
農耕文化基本複合	維持継承	衰退か無い
社会形態	地域共同体	国行政体
自尊、誇り	自力自立、自律	自己家畜化の進行、他力他律

人類史

地史第四紀	人類種	生活様式	時代の変曲点	経済社会組織
更新世 285万年前				
200万年前～	ホモ・ハビリス	狩猟採集		ムレ
180万年前～	ホモ・エレクトゥス	狩猟採集		ムレ
22万年～3万年前	ホモ・ネアンデルターレンシス	狩猟採集		家族
10万年前～	ホモ・サピエンス	前農耕		家族
完新世 11700年前	ホモ・サピエンス	生業	農耕の起源	ムラ、部族
		農業	農業革命	戦争、国の成立、民族
		砦業	手工業	同業者組合ギルド
		工業	産業革命	株式会社
人新世 1945年		アナログ	原子力	石油メジャー
			緑の革命	世界アグリビジネス
		情報デジタル	IT革命	グローバル情報企業

表 3. 農法の比較

文化史	狩猟採集	前農耕	農耕	農業	産業	緑の革命	情報IT	遺伝子工学バイオ
農法	採集	半栽培	自然栽培	有機栽培		化学栽培		
生産物	無い		自家自給	租税	商品	国際商品	戦略物資	
人々	自由	共存	共生	服従		自由希求	自由から逃走	隷従
生物	自然		生き物			化学的生き物	物質的化け物	
農具	手、棒、槍など		木製農具など	金属製農具など	機械	大型機械		自動機械
エネルギー	人力		牛、馬など畜力				石油、核融合など	